

す  
っ  
ぽ  
ん  
・  
か  
っ  
ぽ  
ん

完  
全  
版

松  
島  
花  
山

「時に土方さん、最近亀田川で河童を見た者がいるという話をご存じでしたかな？」

「河童ですと？」

訝しげな顔を見せた土方歳三に、小野権之丞は頷きで応えた。

明治二年五月八日。朝から青空の広がった箱館弁天台場。

小野権之丞は弁天台場から遠からぬ弥生町にある箱館病院で事務方の頭取を勤めていた。

もととはと云えば歴とした会津藩士であり、藩主松平容保が京都守護職として在京中は共に京にあり公用方の職を勤めた。

守護職預りとして誕生した新選組の副長をまかさされていた土方とは、旧知の、そしてその後の長い闘いの中で強い絆がれた同志でもあった。

小野は藩に在っては次席家老の任にあったほどの切れ者と呼ばれたが、鶴ヶ城落城の後

の動乱を潜り抜け、縁あって身を寄せた榎本  
政権下では、かつての縛りから解放されたか  
の如く飄逸さを増した人物であった。  
年齢は土方の十五歳上である。  
昨日、弁天台場を拠点に各地で作戦行動  
に出ている新選組は、箱館の街を抱くように  
聳える箱館山山中において、地雷火を仕掛け  
ようとしていた不審な五人の男達を斬り、負  
傷捕縛したこれらの者を箱館病院分院のある  
高龍寺へと送っていた。  
箱館病院は院長高松凌雲のフランス仕込み  
の博愛精神のもと、敵兵といえどもこれを味  
方同様に手厚く看護した。  
高龍寺分院でもこれらの者の寛容なる処置  
を求めているので、小野がその折衝役として  
台場の新選組本陣を訪ねたわけである。  
土方は、すでにかつて京洛において鬼と恐  
れられた新選組副長はなく、エゾ共和国とも  
いえる榎本武揚軍の陸軍奉行並の地位にあつ

たが、この日は古巣ともいえる新選組の行動  
予定と作戦の確認を兼ね、五稜郭を出て同じ  
く台場を訪れていたところだった。  
「小野さん、戦続きの中で、河童たあまたの  
どかな話だが、私の耳には入っておりません。  
それは何処から出た話なのですか？」  
「病院に野菜を納めてくれる亀田村の次郎と  
いう百姓が見たと申すのです。そ奴は『かつ  
ぼん』がござったと申すのですがな」  
「かつぼん、ね」  
「この辺の在の言葉であろうかな。ともかく、  
一昨日の夜のことだという。亀田の八幡の社  
からまだ上の、もう五稜郭に近い辺りだった  
そうだな」  
その夜は箱館特有の初夏の海霧の出た夜だ  
った。次郎が近所の百姓仲間のもとへ今後の  
戦の見通しと、避難について相談に行った帰  
りのことである。

当時の亀田川は現在とは違って川幅も広く、  
複雑に蛇行しながら亀田八幡宮の脇を流れて  
箱館湾へと注いでいた。今の田家町・白鳥町  
の辺りは一面の草叢で、そんな藪を切り開い  
た数軒の農家があるだけだった。  
仲間と少々のお酒を飲んだ次郎が小用を覚え、  
何となく道から外れた時、川端の草叢を掻き  
分けるガサガサという鈍い音がした。  
ひよいと顔を上げた時、次郎は我が目を疑  
った。  
そいつは霧に霞んだ月明かりの下で、真っ  
黒のようでもあり、緑色に透ら透らとぬめつ  
たようにも見えた。最初子供かと思つたほど  
小さかつたが、子供とは思えない異様な威圧  
感を感じた。次郎の知るどのような着物を着  
ているようにも見えず、かといって箱館では  
もうだいたい前から見慣れた外国人の着る服に  
も見えなかつた。髷はなく、べつたりと濡れ  
た藻のようなものが顔を覆っているようであ  
り、何より頭頂部に薄白い皿を載せているよ

うに見えた。

「か、かつぼんだ！」

昔ばあ様から聞いた話を思い出し、次郎は思わず声を上げた。

すると、そのわずかな声に反応したかのようになり、怪しいモノはあつという間に草叢の中に踵を返し、どぼん、という重い水音だけが残ったのだという。

いっぺんに酔いの醒めた次郎は我が家へ飛んで帰ると、そのまま布団をかぶって震えていた。

翌朝、果たしてあれは夢ではないのかと、恐るおそる昨夜の場所へ行ってみたが、確かに草を踏み分けたような痕跡はあるものの、ただの農夫である彼にそれ以上の発見はなかった。

「馬鹿バカしい。敵の間諜に決まっていますよ。」

土方と共に小野の話を聞いていた巨漢が声

を発した。箱館新選組頭取の島田魁である。京都における新選組の初期からのメンバーであり、隊随一の腕力を誇った男は鳥羽・伏見から幾多の修羅場を共にくぐり抜けて来た土方の腹心であった。

「現に昨日の箱館山の奴等だっているじゃないですか。五稜郭の堀に水雷火でも仕掛けに来たんでしよう。あるいは城内に潜入し、総裁の首を狙うか、井戸に毒でも放り込むか」

「しかし、あなたたちは恐ろしいことを平気な顔で言うもんだ……」

小野は苦笑いをした。

彼らをそんな男達にしたのは他ならぬ会津藩であることを彼は誰よりも知っていたからである。

「どう思われます、土方さん？」

「ふむ。大方君の考えの通りだろう。しかし、河童とはな……」

土方はなぜか子供っぽい笑みを浮かべ、遠い目をしたように見えた。

エゾに渡って来てからの土方歳三は、かつて京童にまで鬼と呼ばれた峻烈な顔をどこかに置き忘れたかのようにだと、昔を知るすべての人々に評されていた。もちろん、松前城攻略戦や二股防衛戦など、戦いにおいては過酷さを少しも譲ることはなかったが。しかし、そんな小野や島田の目からしても今の土方の表情はあまりにも穏やか過ぎた。「小野さん、まだ時間は大丈夫ですか」少年のような顔をしたまま土方が言った。「時間とは？ 幸い捕虜たちの処遇は森君や島田君が請け負ってくれたので私の用件はすべて済んだが、まだ何か？」「座興に付き合って頂きたい」「座興とは？」「なに、河童さ」土方はまた可笑しそうに笑い、「島田君、君もだ。それと蟻通君も呼んでくれ。酒もつけてな」「土方さんまだ昼前ですぜ。それに河童の座

興って一体何ですか」  
「まあ、たまには良かろう。俺が亭主だ。付き合えよ」  
やがて一室にあり合わせの酒肴が整えられて、さらに古参の新選組隊士である蟻通勘吾もやって来た。  
「副長、お呼びと聞きました。が任務ですか」  
膳を見て怪訝そうな顔をする。  
「座興だ。それにいつも言うが副長はもう止せ」  
言われて蟻通は照れたように笑った。  
彼の新選組における戦歴もまた古い。讃州は高松出身という蟻通は、かの池田屋事件の時は土方隊に属し、局長近藤勇らの応援に駆けつけた池田屋において奮迅の活躍をし、後日恩賞の栄典に与ったつわものである。  
各々が席に着き、杯に酒を満たして改めて互いの顔を見やると、往時の黒谷の会津本陣や壬生の新選組屯所が脳裏をかすめるようだ

った。

「さて土方さん、これは一体どういう趣向  
ですかな？」

酒で口を湿した小野が柔らかな声で促した。

「これは小野さん。ほんの座興と申したは、  
さきほどの河童の話でござるよ」

「はて、先の次郎の見たと申す……」

土方は微笑みつつ首を振った。

「いや、そうではない。大体が小野さんは河  
童というモノをどの様なものとご承知でおら  
れようかお聞きしたい」

「さよう、河童というモノですか？」

小野はやや思案げであつたが、

「まあ、あれですな。水中に棲むもののけの  
類なのでしようかな。頭に皿を頂き、手には

水掻き、背に甲羅。胡瓜を好むとか、相撲を

好むとか謂われておるのではないでしょうか。

川で泳いでいるものを引きずりこんで、尻  
から命の素を奪うとも国ではいっておつたよ

うな気がいたします」

「大概そのようなモノと伝わっておるようですな」

「若松のご城下のさる寺には、その昔河童が残した詫び証文が伝わっておるとか、そんな昔話を老いた者から聞いた覚えもあります、しかし土方さん。そんな化け物ともつかないモノが本当にいるのでしょうか？」

「新選組では昔から妖怪変化の話禁ずる決まりがありましたから、おおっぴらに口にするわけにはいきませんでした、どうも全国各地に似たような話は伝わっているらしいですな。島田君、君は大垣だったな？」

「はあ、と島田はその巨体に似合わない自信なさげな声で、

「私らがこまい時分はガメとか、ドチガメとか申しましたな。あるいはスツポン」

「すっぼん？次郎はかっぼんと申したが、同じことですかな」

ようやく小野も興味深そうに言葉を重ねた。

「鼈という亀がおりましよう。甲羅がつるとして、鼻先がこうツンと尖っておる。あれの年古きものが化けるのだと。だからスツポ  
ン」

「面白いな。蟻通君、君はどうかね？」

「わしらが言うガ―ラのことのようなですな。しかし、副、いや土方先生。なんだってまたそんなに河童だかすっぽんだかにご執心なんです。どうも先生のお人柄にやあ合わんお話のように思えるのですが」

蟻通はぼそぼそと言った。彼にしる島田にしる歴戦の猛者には今一つピンとこない。

「だから座興と言ったではないか」

土方は苦笑して、

「芹沢先生のごことはよもや忘れまい」と、妙なことを言った。

土方の云う芹沢先生とは、発足当時の新選組の筆頭局長だった芹沢鴨のことである。

元水戸天狗党の大物で、幕府が將軍家護衛

のためには募集した浪士隊に参加し、のち近藤  
ら一派と共に新選組を立ち上げた人物であつ  
た。  
劍は神道無念流の皆伝者で、恐ろしく手筋  
が早く、まるで芋がらのように人を斬った。  
島田が隊随一の剛力の折り紙を得たのは芹沢  
没後の話である。それほどほどの豪の者であつた。  
その芹沢は文久三年九月十八日の豪雨の夜  
に、宿舍として使っていた洛西壬生村八木源  
之丞宅において、数人の刺客に襲われ落命し  
た。同衾していた愛妾や、隣の部屋で寝てい  
た配下の者も瞬時に斬り殺されている。  
会津藩に届けられた公式の報告では、『下  
手人は長州系の浪士と思わるるも不詳』とな  
つてはいるものの、実際に手を下したのは土  
方であつた。他に沖田総司・山南敬助・藤堂  
平助らであつたともいう。  
性豪放なるも酒乱にして残虐。いまだ名の  
浸透していない洛中において、余りの暴虐無  
礼の数々の振舞いに対して会津藩自身が誅殺

令を出したと伝えられている。  
隊の内外にその秘密は固く守られたが、藩  
の公用方だった小野、隊の探索方伍長として  
幾多の機密に深く関わった島田、さらには古  
参隊士であり土方付きといつていいほどの戦  
歴を誇る蟻通達はその真実をそれとなく知っ  
ていた。  
「芹沢先生の家は、常陸の行方という処ら  
しい。御先祖はこの地の領主であつたそうだ」  
土方はしかし、過去の因縁は一切知らんと  
でもいうような口調で話し始めた。  
「ある夜、この芹沢の殿様が御領内を見回ら  
れ帰途に就く途中、とある橋の袂で騎馬の脚  
を河童に取られたという」  
「なんですって」  
素っ頓狂な声を上げた蟻通に構わず  
「さすがに芹沢先生の御先祖だ。殿様は腰の  
太刀を一振りして鮮やかに河童の手を斬り落  
としたという。そしてその夜遅く、河童が取

られた手を返してくれと殿様の枕辺に現れた  
そうだ」  
土方の話に今は誰も口を挿むことはない。  
「慈悲深い殿様により無事に手を返してもら  
った河童は、二度と人に迷惑をかけぬという  
証文を書き、さらに秘伝の傷薬の製法を伝え  
ていったということだ」  
「不思議だな土方さん。それは国に伝わる話  
と瓜二つだ」  
うめくように小野が漏らすと、土方は続け  
て  
「不思議なのはそれだけじゃあない。その後  
代々芹沢家は家伝薬『筋渡し』をもって財を  
成したというのだ。これは俺が芹沢先生から  
直々に聞いた話だから間違いあるまい。現に  
水戸の近くには殿様が河童の手を斬った橋が  
『手奪橋』という名で今も残っているそうだ」  
「これは驚きだ。あの人の家は薬を創ってい  
たのですか？しかし、ってことは……」  
島田の言葉に土方は一つ頷いた。

「そう、俺の家も薬を創っていた。そして、俺の家にも河童の言い伝えがあるのさ」

土方は武州多摩の石田村の生れである。家はその辺りの大百姓であつたが、同時に家伝薬である『石田散薬』の製造販売でも知られていた。土方自身も若いころは薬行李を担いで近在を行商に歩いてゐた。それは近藤勇と知り合い、江戸の試衛館道場に身を寄せるまで続けられた。

石田散薬は後に新選組において採用され傷薬として常備されてゐた。

「宝暦の頃というから今から百五十年も前のことだろう。この時の土方家の当主が多摩川で悪さを重ねる河童明神を懲らしめたところ、その夜に河童明神が夢枕に立ってあの薬の秘伝を伝えた。我が家では謂われている」

「なんてこつた。あなたの家まで河童と縁づきだつたなんて。新選組は河童に取り憑かれてゐるんじゃないやありませんか」

島田の呆れたような声に土方は皮肉な笑み  
で、  
「だがな島田君。河童に縁があるのは俺たち  
ばかりじゃあねえんだ」  
「と申しますと？」  
「土佐にやあスイテングという河童がいるそ  
うだ。字をあてりゃあ水の天狗だろう」  
突然話が変わり、一同は怪訝な顔のまま土  
方の口元を見つめている。  
「同時にこれは水天宮のことでもあるらしい。  
水天宮は海や航海の守り神だが、同時に平家  
一門とともに海に沈んだ安徳帝を祀っている  
とも聞く」  
土方は手酌で酒を注ぎ口に運んだ。  
「水天宮の総本山は筑後の久留米だ。そして  
その久留米水天宮の神官だったのが、あの真  
木和泉さ」  
ううつと、島田の喉から声にならない響き  
が漏れた。  
「真木っていうと、あの天王山の……」

蟻通の顔は幾分青ざめて見えた。  
久留米藩士であり、久留米水天宮の神職でもあった真木は熱烈な尊王主義者で、藩政改革に失敗し一時は国元で蟄居生活を送っていた。  
その後長州藩に接近してその参謀格となり、文久三年八月の蛤御門の変では長州軍の一隊を指揮し洛南天王山に布陣した。  
この政変において長州は会津・薩摩の連合軍に敗れ京を追われるのだが、真木達の一隊は天王山において壮烈な自刃を遂げている。  
天王山を攻めたのは新選組であった。島田や蟻通の脳裏には、陽炎揺らめく山頂で、事に腹を搔っ捌いていた真木の姿が甦った。  
「一時期、真木は国において蟄居を命ぜられ、何とかいう神社に籠っていたそうだが、わざわざわざわざここまで訪ねて行った奇特な男がいる。島田君、俺たちとは縁のあった御仁だが、誰だと思いかね？」

「さて桂ですか？高杉ですか？」

監察方だった島田は長州藩士にも詳しい。

「清河八郎さ」

土方にそう言われて島田の背をざわつと、  
なにか得体のしれない感覚が駆け下りた。

清河といえ、そもそも新選組の前身であ

る浪士隊結成を幕府に働き掛け、芹沢や近藤

・土方といった面々を京の地にまで連れ出し

た男ではないか。上洛後たちまち態度を一変

させ、浪士団をもって攘夷の先駆けならんと

画策し身を翻して江戸に戻った。

江戸において幕府刺客に抹殺されたため、

島田や蟻通に面識はなかったが、新選組の歴

史を語る上で今や伝説といつていい怪人物で

ある。

「いやはや、土方さん。私も空恐ろしくな

ってきたが、それにしても相変わらぬ地獄

耳だ。土佐の河童の話など、一体ぜんたい何

処で仕入れられた？」

小野が謹厳な面持ちで尋ねた。

「近藤さんが捕まった後、私は江戸で勝安房に会った。その時の話のついでに聞いたので。相変わらぬのらりくらりと御託を並べていやがったが、私はともかく近藤さんの助命嘆願書を書いてもらわねばならなかったもので、黙ってその話を聞いてはいたが、勝さんにこの話を吹き込んだのは、おそらく坂本竜馬」

「坂本ですって！まだ私を驚かせるんですか」

島田が大声を上げた。

「竜馬は勝さんの弟子だった男だ。そう驚くことあるまい。奴がお尋ね者になる前に二度顔を合わせたことがあるが、あのもっさりした面でガキの話すようなことばかり言つてやがったが：

それより島田君。もっと驚く話もある。君は二百人の河童と一緒に戦っていたんだぜ」

島田は目を丸くした。二百人の河童とは何であろうか？

しかもなぜ二百匹でなく二百

人なのだろうか？

「甲陽鎮撫隊を結成した時だ。近藤さんは勝安房に上手く言い含められて、軍資金と砲・弾薬を与えられた」

「勝てば、甲府百万石分捕り放題ってえ、あれですな」

「近藤さんはもう大名になったような気分だった。しかし金はあるても兵力がねえ」

「もう仲間も大分減っておりますな」

「総司の野郎は、これ見よがしに四股なんぞ踏んでいやがったが、もうまともに戦える身体じゃあなかつたのは誰の目にも明らかだった。あれを多摩まで連れて行ったは近藤さんの最後の見栄と、総司に対する優しさだったのかもしれん」

「あっ！」  
と、蟻通が叫んだ。

「副長、もしや二百人とは浅草の……」  
ニヤリと土方はかつての鬼副長の凄みのあ  
る貌を見せ、

「そうだ蟻通君。あの浅草の二百人だ」  
「しかし副長、ありやあ化物じゃなくて歴と  
した人間でしたが……」  
「そうだ。だがな、河童とは身分外の者をい  
う呼称でもあるのさ。奴等はみな長吏の者だ」  
一同はまたしても絶句せざるを得なかった。  
浅草の二百人の経緯とはこうである。  
新選組の窮地に一肌脱いだのは、將軍御典  
医であり、かねてから近藤・土方と親交のあ  
った松本良順である。彼が仲介の労を取った  
のは浅草の穢多頭、矢野内紀。世襲名を弾左  
衛門という。士農工商の外にある身分の者た  
ちを統括、管理する頭領であった。  
現代の社会でいう被差別民。当時は穢多や  
非人といった階級があった。  
西国では河多、東国では長吏と呼んだりも  
した。竹細工・箕造り・皮革生産・山仕事・  
水番・遊芸などを職とした人々である。  
東国において全てのその階級層を統治する

弾左衛門の財力は小大名にも匹敵すると言われた。

その弾左衛門が配下の長吏二百人を戦力として提供したのだった。

「弾左衛門家も薬を造っているのだ」

「ええっ？」

その言葉はもはや誰の口から迸ったものか判らない。

「大体が薬造りってえのもある意味忌まれた仕事なのだ。俺の家の石田散薬は薬草が原料

だが、弾さんのところは人胆だ」

「なんですって！」

呻くように蟻通が言う。

「処刑された罪人の死体から肝を抜くんだ。こいつは精のつく妙薬とやらで諸国の大名や

金持ちによつぽど珍重されたらしい。巨額の金を積んでな」

処刑人の処理は弾左衛門の特権である。歴代の弾左衛門は、これも歴代の首斬り役

人を勤めた山田浅衛門と結託して死体から肝  
を抜いていた。他にも脳や胆をも抜き薬材に  
していたともいわれている。  
「その他にも石見銀山鼠捕りをはじめ毒にな  
るものも多い。山ん中に分け入ったり、虫や  
獣を煎じたり、身分のあるもんにはやあお断り  
の仕事といえる」  
「：：」  
「土佐なども身分差には殊の外やかましい国  
柄らしい。なにせ下士は下駄すら履けないそ  
うだ」  
土方は自らのロングブーツに目をやった。  
「坂本は早くから靴を履いておりましたな」  
「そうだ島田君。竜馬捕縛の命令の中で、靴  
を履いているのがそれだと指示しただろう。  
しかし奴は低い身とはいえ武士だ。河童に  
された奴らの苦勞たるや考えることもできん。  
そうではないか蟻通君？」  
しかし蟻通には答える術がなかった。  
「河多や長吏は傘を差すことを禁じられてい

ると聞いたことがある」

低く重い声で小野が語った。

「だから土方さん、傘の代わりに着る雨具を合羽と言うのではないか！」

「なるほど、流石は小野さんだ。そいつは気が付かなかった」

「乞食は菰を被っていますな。あれも同じことですか？」

島田が何かを思い出したように言った。

「一時、長州の桂小五郎が乞食となって四条橋の河原者に紛れているとの情報がありました

たが……」

「あれら河原者こそが河童さ。ただ奴等は浅草の河童と違い、穢多頭ではなく祇園社の支

配下にあった」

「祇園社ですか……」

島田も遠い目をしだしている。

祇園社を現在では八坂神社と呼ぶ。

池田屋の戦いの時、隊士たちが集合したの

はこの神社の西門石段下の祇園会所であり、

その後しばらくして、隊の幹部の一人であつた谷三十郎が斬殺体で発見されたのも祇園社の石段下である。

「しかし土方さん、この戦はまるで河童戦争じゃありませんか？」

島田がうめいた。

「うむ、と言うよりもな、この戦争は身分を壊してゆく戦いなのだと思う」

「身分を壊す戦い……」

「俺は元来が多摩の百姓の息子だ。それが新選組を創ることで武士の身分を得た。最後に直参、大御番組頭にまでなった。普通の世だった。在りえない話だ。

しかしそれも幕府の瓦解と共に水泡に帰した。代わりに今はエゾ政権の陸軍奉行並だ」

「しかし土方の表情には屈託がない。

「先日、エグレス船で浅草の弾左衛門さんから手紙が届いた。どうやらあの人には近々長吏から平民に格上げの御沙汰があるらしい。もはや勤皇だ佐幕だという争いではない。

身分をどんどんと壊して、何か新しい世を創る。そのための戦いだ」

「そんな世が本当に来るのでしょうか？」

「さて、それはいつになるのかは判らねえが、勝つても負けてもきつと来る。

現に榎本さんだって入札で決められた総裁だ。もつとも」

と、いつて土方は最後の盃を空けた。「俺が生きてるうちはチト無理らしい。

さて、座興も終わりだ。改めて今日の作戦を変更する」

「はっ！」

島田と蟻通に緊張が走る。

「今夜八字、新選組は七重浜・有川の敵に夜襲をかける。先日ぶん捕った四斤山砲を持つ

て行きたまえ。まずできるだけ派手な音で砲撃するんだ。斬り込みの判断は島田君に任せ

るが、銃撃もできるだけ派手に展開しろ」

「土方さんは指揮を取らないんですか」

「俺は河童退治だ。蟻通君、厄介だが君に同

道していただく」

「はいっ！承知いたしました」

土方は一転して小野には穏やかな笑顔を見せ、

「長々とお付き合いいただき恐縮です」

「しかし土方さん。官軍の総攻撃も噂される昨今だ。なにもあなたに直々にお出ましになることもあるまい」

小野がそう言うと土方は

「そうではないのです。まだまだ負ける気はないが、いずれこの戦も終わりましたよう。

私たちの政権がたとえどうなるうとも、この箱館の街は残る。

私はこの街に借りを作りにたくないのです。

まして相手が河童とならばなおさらだ。

明日は私が小野さんの許へ河童退治の首尾を報告に上がりましたよう」

と莞爾として笑った。

台場には潮の匂いのする風が吹きこんでいた。

闇に混じってむせかえるほどの草いきれが  
辺りを包んでいた。  
エゾの五月は草花が躍っているように思わ  
れた。多摩にも京にもない生命力を土方は感  
じていた。  
見上げれば満天の星空である。チョッキの  
隠しから鎖に繋がれた銀時計を出す。月明か  
りが間もなく八字を教えていた。  
やがて、遙か西の空から遠雷に似た砲声が  
轟くのが聞こえてきた。  
折からの海風に乗り、竹が爆ぜるような音  
が軽快に響くのは島田が指揮するエンファイ  
ルド銃の発射音であろう。  
急な海風に乗るようにな群の雲が月明かり  
を遮った。  
遠く響く雷砲に交じり、  
「とぶり」という音が土方の耳を捉えた。  
日中、次郎に確認した地点からやや上流。  
土方と蟻通の目から見てここぞという草深い

土手。一本の柳の木陰でかつて京洛の鬼と呼ばれた男は身じろぎもせず、に何かを待っていた。た。ちやぶりー  
小さな黒雲は月に嫌われるように姿を消し、水面が紛れもなく動きはじめた。  
やがてガサガサと草叢が生命を宿したように揺れはじめ、それを掻き分けて黒い影が現れた。  
小男である。顔に油煙のような物をべったりと塗り、ザンギリ頭に白い小皿を結わえている。身体にぴったりと纏ったのは、黒い絹で編んだ網のような衣装であった。  
ズルリズルリと重い足取りを草の上に運びながら、目だけは辺りに隈なく配っている。  
しかし土方は柳の裏で気配を消し、それと気づかせない。  
やがて河童男は月明かりが照らす小道の上、にその醜悪な姿を曝した。背には小振りな刀を負っていた。張り詰めていた気を抜き、し

ゆるしゅると不思議な吐息を漏らした途端、  
「なんだ、河童ではなくスツパではないか」  
土方の嘲るような声が飛んだ。  
スツパ（素破）とは忍者のことである。  
仰天して振り向いた河童男の目に柳の陰か  
ら現れた土方の姿が入った。まん円く見開か  
れた濁った両眼が折からの月明に照らされる。  
「それとも月とスツポンか」  
あわてた河童男は踵を返し、元の草叢に跳  
び込もうとしたが、そこにはすでに白刃を青  
眼に構えた蟻通勘吾の姿があった。  
「残念だが、お前が越えて来た川は三途の川  
だったようだな」  
土方が鯉口を切る。河童は身動きすること  
もできない。鞘音も立てずに抜いたのは幾多  
の血を吸った会津兼定。  
「俺は箱館軍陸軍奉行並、土方歳三。河童に  
名があるなら名乗るがいい」  
それを聞いた河童の口から呪いの言葉が迸  
った。

「ほう、土方とは巡り合わせだ。俺もぬかつたがお前も生きては帰さぬ。水戸藩士、下村周蔵」

妙にくぐもった声であった。

「芹沢鴨とは義兄弟の仲だ。因縁という物はあるものだな」

口元はもぐもぐと動いているが、一度も開かれぬ。何処からか漏れるような低い声が続く。

「京では随分と羽振りも良かったそうだが、こんなエゾの果てまで来て市中警備とは、犬は何処まで行っても犬と見える」

「犬じゃあねえ。俺こそが河童よ」

土方の応えに目をむいた河童男はそれ以上何も云わず、背の忍び刀を抜き放ちいきなり土方に撃ちかかった。

撃ち込みは浅く見えた。

土方が自分の間合いを確保しようとして踏み込んだ瞬間、河童の眼が怪しく笑った。

「副長オ！」

蟻通が叫んだ。  
ぶしゅつ、と河童の口から霧が迸り、土方  
のまさに顔面を襲った。  
すでに土方の姿はない。  
とっさの判断で身は左に跳んでいた。禍々  
しい霧は虚空に散った。  
身を立て直す間もなく、河童の今度こそ渾  
身の一撃が繰り出された。  
一瞬河童の剣先が土方に届くと思われた。  
しかし、下から撥ね上げた兼定が河童の刃  
を跳ばした。勢いに乗った土方の剣は頂点で  
くると反転するや、加速度をつけ、河童の  
皿から頭蓋骨をもろともに叩き割った。  
脳漿を吹き散らし、亀田川の草叢に河童男  
は倒れ込んだが、その時はすでに即死してい  
た。

土方は五稜郭の私室には帰らず、大町にある  
帰路を月明が煌々と照らしていた。

丁サの宿へと戻るといふ。

終始無言だった土方は、亀田川に架かる中ノ橋に来ると歩を緩め、背後の部下を振り返り返った。

「どうした蟻通。今更何を硬くなる」

「副長：：わしは：：」

「ああン？」

「わしは隠していたことがございます：：」

袴を握りしめ蒼白な顔をしている蟻通に一

瞬目を細めたが、

「阿呆か、おめエはよ」

「いや、しかしわしは！」

「何だい。今更になつて紀州の間者でござい

ましたつてエのはなしだぜ」

「ふ、副長、なぜそれを！」

蟻通勘吾は茫然と橋上に立ちつくした。

よっこらせと、土方は欄干に身を持たれか

けさせた。

「天満屋の件の後で紀州の三浦休太郎殿より

申し入れがあった。蟻通勘吾は紀州が新選組

の内情を探るために送り込んだ者であるが、これよりは真の新選組隊士として存分に扱われよとの事だった。かつて紀州公徳川慶福の將軍擁立に功があり、三浦休太郎とは紀州徳川家の公用方である。かつて紀州公徳川慶福の將軍擁立に功があり、家中に異例の出世を成した。慶福とはむろん後の十四代將軍家茂である。この三浦が『いろは丸事件』を巡る賠償金問題から、坂本竜馬殺害の黒幕と見做されて京都の天満屋という宿において海援隊士ら十六名による襲撃を受けた。慶応三年十二月七日のことである。三浦の警護は紀州藩主徳川茂承の希望で新選組にまかされた。世にいう天満屋事件は海援隊側、新選組側双方一人ずつの死者を出したが、三浦を守りきった事により新選組は作戦を成功させたといつてよい。当夜天満屋にて指揮を執ったのは斎藤一であるが、蟻通勘吾もこれに参加していた。

その新選組の活躍と、一党幕臣への御取り  
上げの沙汰と相まって、紀州藩では蟻通の存  
在を近藤・土方に謝し、重ねて新選組隊士と  
して処遇を願ったという。

「お前のことはよ、いずれきちんとせねばな  
らないと近藤さんとも話していたんだ。

ところがそのすぐ後で近藤さんは撃たれる  
は、戦はおっ始まるはで、言いそびれてここ  
まで来てしまった。許してくれろ」

「ふ、副長！」

「そうしゃつちよこぼるな。そういう事も在  
ったということだ。それよりもな……」

土方は嘆息した。  
「お前さん、忍びの筋だな？」

土方はようやく合点がいったように思えた。

蟻通にはああいったものの、実は入隊から  
天満屋までの間、何度彼を斬ろうとしたこと  
かわからない。真剣に近藤と話し合ったこと

さえ二度ではきかない。

彼の存在感の希薄さが心に引つかかっていた。

怯懦なわけではない。新選組においてはそれがそのまま死を意味する。

実際、蟻通は池田屋でも三条大橋でも勇敢だった。

無口なわけでもない。人嫌いでもないよう

だ。ただいつの間にかそこにいて、いつの間にかそこにはいない。その存在が奇妙なほど薄かったのだ。

「めんどくせえ、いつそ斬っちまうか」

「まて歳。彼に落ち度は無いではないか」

近藤はいつもそういつて蟻通を庇っていた。そのかわり出世はしなかった。隊の人員が増え数度の編制替えを経ても、彼は平隊士の

ままだった。しかし、それを不思議と感じさせないのが蟻通勘吾の不思議だった。

「さっきの河童野郎と渡り合う前、おらア最  
後までお前さんが抜くの気がつかなかった。  
野郎だって、俺を見た時よりもお前さん  
の姿を認めた時の方が驚いていた。  
ようやく判ったよ。お前の気配の消し方は  
俺の比じゃねえ。それによ……」  
土方はにやりと笑った。  
「河童が毒を吹いた時だ。確かあん時にやあ  
俺よりお前の方が早く反応したはずだ。あい  
つの術に気がついたんだ。  
間違えねえ。お前さんはかなりの修業を積  
んだ忍びだろう？」  
いつの間にか月の位置が動いていた。  
蟻通はゆつくりと欄干に両の手を突いた。  
「おっしゃる通りです副長。わしの家は素は  
といえれば根来衆なのです」  
そう言っただけで今度は土方を振り返る。肩の荷  
が下りたような顔をしている。  
「根来衆とは忍びの筋か」

「は、織田信長公と戦ったのも我ら先祖と聞いております。紀州根来寺配下の忍びだと伝わっております」  
そうして蟻通は自身の出自について語り始めた。  
根来衆として根来寺の配下にあつたのが、後に紀州田辺の安藤家に仕えたのが今の繋がりがある。  
安藤家は紀州家の家老を勤める家柄である。やがて寛文年間。紀州藩初代の徳川頼宣の三男である松平頼純が、支藩として伊予西条に入封した。西条藩という。  
この支藩は紀伊の本家に跡継ぎのない場合にそれを継続するため、のスペアとしての使命を持つていた。また、西条藩に後継がない場合も紀伊の本家から血筋が送り込まれた。  
安永四年に立った六代目西条藩主松平頼謙も紀州の出である。そして蟻通の先祖もこの時に西条勤めとなった。

ちなみに天満屋で刺客に襲われた三浦休太郎もそもそもは西条藩の者である。それが慶福擁立の功により紀州藩に取り立てになつており、さらにはその慶福が家茂となつて将軍職を継いだため、空位になつた紀伊家を継いだのはこれも西条藩から来た徳川茂承であつた。

「お前さん讃岐の高松の産つて届を出していたなあ、西条つていやあ隣国つてエ訳か。なるほどな。

高松といえれば確か水戸家の一門だったな。四国の片隅で御三家のつば迫り合いがあつたのだな」

京都において壬生浪士組が將軍家茂警備を率先して行い、かつその首脳に水戸天狗党の流れを引く者がいると聞いた紀州藩は、その内情を探り、本家出身の將軍を守る役目を支藩である西条藩に命じた。

露見した時の保険であろう。捨て石であるといつてもいい。土方はそう思った。会津のために新選組がやらされた立場だ。土方は得心が行ったという顔をした。

「副、いや、土方先生」

「ああ？」

「昨日の河童の話、面白うございました」

「なんでエ、急に」

土方の顔に不審の影が戻る。

「実はわしに家にも河童らしき話が伝わっておるのです」

「何だと……」

「わしのご先祖は今も申した通り紀伊の田辺の出だそうですが、安藤家に仕える前は同地にある蟻通神社に関わっていたと聞いております。根来忍者は陰としての身、平素は蟻通神社の神人だったとか」

「ほほう」

「西条の我が家にも蟻通明神が勧請されてお  
りますが、子供時分から聞かされていたこの  
明神様の正体というのが……」

「何と」

「沙悟浄だ」と

土方は絶句した。

子供だった蟻通に伝えた親がどれほど正確  
に話していたのかはわからない。

しかし、現在も和歌山県田辺市にある蟻通  
神社に祭られる蟻通明神は、元は中国の深沙  
大将だとしている。

この深沙大将は中国の水神の一種で「西遊  
記」における沙悟浄のことである。

西遊記は江戸末期においては『絵本西遊記』  
などで庶民にも広く親しまれていた。

「お前さんも河童の一族だったってわけか」  
土方はそう笑うとようやく欄干から身体を

離れた。

「しかし、天下の御三家、水戸藩までも薩長の手先ですか。亡くなった芹沢先生も浮かばれませんか」

一本木の関門近くまで来た時蟻通がつぶやいた。

すると土方は不敵な笑みを浮かばせながら「何を見ていたのだ蟻通、あ奴は河童だ。水戸藩とは何の関係もねえ。

陸軍奉行並の土方歳三が、亀田川に巢食う毒を吐く河童を退治したと明日から箱館市中に触れて廻るのだ」

「なるほどそういう筋書きでしたか。これは気がつきませんでした。確かに討ち取られたのは箱館に害をなす悪河童ですな」

コトが終わった後で相手に不利な風評を流す。土方のいつものやり方だった。

芹沢が死んだ時もそうだった。刺客とされた長州浪士の姿を見た者は誰もいない。

あの池田屋の時もそうである。浪士達は池田屋に集まって何をしていたのか。

『強風の日を選び御所に放火して、駆けつけた守護職や所司代を血祭りに上げ、騒ぎに乗じて玉体（天皇）を長州に動座する』計画を練っていたとされるが、関係者は皆斬られるか捕らえられるかして真相はわからない。捕らえられ六角獄舎に收容された者たちも、蛤御門の変のドサクサで皆斬られて死んでしまった。そういう噂がある。と、蟻通に耳打ちしたのは土方であった。噂は隊の者から、出入りの者へ、やがては京の町衆の耳へと燎原の火のように広まっていった。『新選組が成敗したんは、どえらい悪人たちやっただんや。壬生の浪士達はこの京の都を救うたんや』と。

「いやまて、蟻通」

土方は足をとめて振り返った。

「芹沢さんは素行はともかく、志はどこまでも高かった。あの人こそは大河童だったが、

さっきの野郎は河童を名乗る資格もねえ。  
おおおかたすっぽんか、かつぽんだろうぜー  
土方の振り返った彼方は遥かな過去であつ  
たのかもしれない。  
翌五月九日。箱館奉行の永井玄蕃、陸軍奉  
行並の土方歳三らが訪れたと、箱館病院調役  
頭取の小野権之丞は自らの日記に記している。  
しかし、そこで何が語られたかは残さなか  
つた。  
五月十一日。この日官軍による箱館総攻撃  
が行われ、孤立した弁天台場を救出に出た土  
方歳三は箱館と亀田の境にあつた一本木関門  
周辺で敵の銃弾に当たつて戦死した。享年三  
十五。  
同日朝。霧に紛れて背後の寒川地区から上  
陸し箱館山を襲つた官軍兵と戦つて、蟻通勘  
吾も壮烈な最期を遂げた。享年三十一。

島田魁は弁天台場にて降伏。東京に送られ、後に名古屋預かりとなった。赦免後は京都に赴き、かつて一時期新選組が屯所として使っていた西本願寺の守衛などをし、明治三十三年に、かの地で七十三歳の大往生を遂げた。

小野権之丞は箱館病院にて降伏。その後病院長高松凌雲とともに官軍と箱館軍との和平策の周旋に奔走した。

戦後は下総の古河に謹慎となる。現在は水戸と共に茨城県となっているかの地で、河童に思いを馳せることはあったであろうか。

晩年は東京に出て、明治二十二年七十二歳で生涯を閉じた。

最後の大河童、浅草弾左衛門は明治元年に平民へと身分引き上げが行われ、維新後に弾直樹と改名した。

皮革と靴の産業振興に尽力し、小野と同じ明治二十二年に世を去った。

大正時代になって函館の亀田川に大きな改修の手が入った。

五稜郭橋と白鳥橋との中程に、防火水道のための貯水池が造られた。大きな五本のコンクリート製橋梁で水を支え、そこには深い澱みがあった。『すっぽん・かつぽん』と呼ぶようになった。

昭和も三十年代までこの呼び名は使われていたようである。だが、この珍妙な呼称が何に由来するものなのか、幾つか説はあるが詳らかではない。

（完）

